郷土室だより

第106号
平成12年2月15日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電 話 3543－9025
刊行物登録番号 11-040

「続」中央区の"橋"（その6）

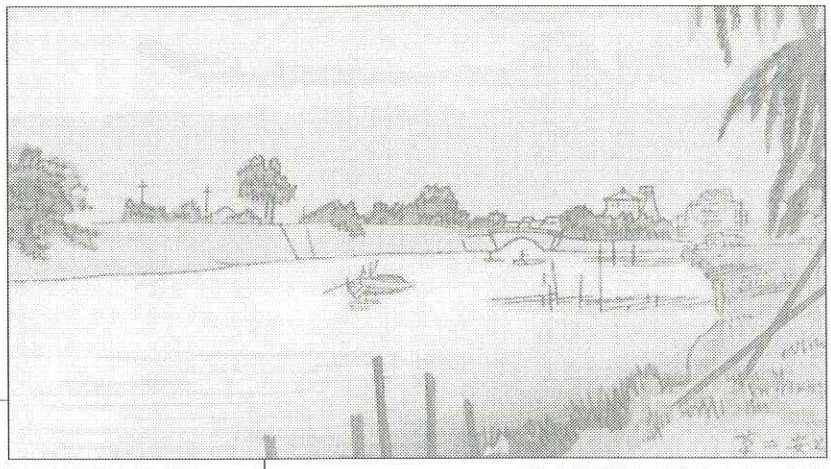
◇城の東側の外堀

この外堀とは前々号（第一〇四号）の最後のところで触れた外堀、つまり徳川氏による第一回目の天下普請（慶長一一～一二年＝一六〇六～〇七）で、常磐橋－一石橋－日本橋とほぼ九〇度近く東に曲げられて掘られた日本橋川の流路の曲がり角の一石橋西側から南に、後の城門名でいうと呉服橋門－鍛冶橋門－数寄屋橋門－山下橋門－幸橋門を経て、汐留川に合流した堀のことです（なお一〇四号で述べた結論と、推論＝この外堀ができるまでの経過については、後に改めて整理して取り上げます）。

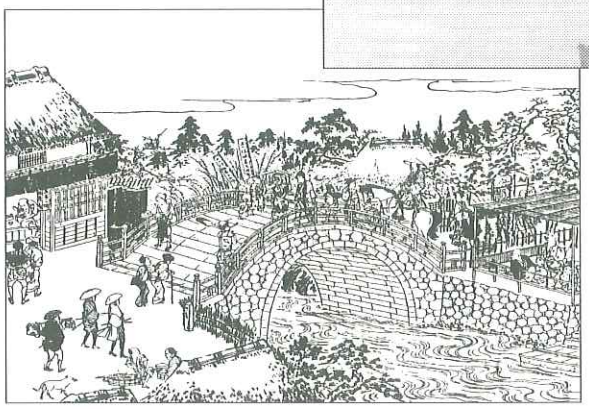
いまは千代田区と中央区の境になっているこの約二・三キロメートルの間は、全て埋め立てられて、鉄道線路・自動車専用路・地下駐車場・地上、地下の商業施設などが入り交じった場所になっています。

その代表的なものが東京駅八重洲口とその地下街で、さらに南の元の数寄屋橋門を中心にした場所には幾つかのショッピング・センターが"軒"を並べています。

さらにその南は銀座商店街の西側を区切



鍛冶橋遠景（井上安治　画）



目黒太鼓橋（『江戸名所図会』）

る高速道路下の商店街です。

建設当時のこの堀にはいろいろの役割が与えられました。第一は日比谷入江埋め立ての前提として、その入江に流れ込む平川の河流を付け替えること。第二はその付け替え水路に輸送路としての役割を与えること。第三は同時にその水路を江戸城の外堀にすること。

そして何よりも特徴的だったのはこの堀が掘られた場所は、江戸前島の尾根筋に当たるところが選ばれていることです。

毎度繰り返すようですが、四百年前の日本のある程度以上の規模の土木工事では、沖積地の軟弱な地盤に堀を掘ったり構造物を架設する技術は無かったのです。堀・水路・運河など呼び方は違っても実態の同じものは、おおむね乾燥した地盤の場所を選んで施工されています。

この外堀のラインはまさにその標本のようなものでした。

◇鍛冶橋人

鈴木尚先生の著『日本人の骨』（岩波新書　一九六三年刊）の第一章は「よみがえる室町時代の人びと」であり、その章の中心的なテーマは「大正二年十月　東京市鍛冶橋改架工事の際、濠底より発掘せる頭骨」（一三体）の東大の解剖学教室での再発見から始まります。

そして、この鍛冶橋人骨を手掛かりに、中世の江戸前島・日比谷入江沿岸・皇居内などで発見された人骨の比較から、家康が江戸に来る前の江戸の有様が描かれるのです。

ここではこの名著にこれ以上に立ち入ることはせずに、その話の発端になった鍛冶橋そのものに焦点を当てて見ることにしましょう。

俗に「江戸城三十六見附」と呼ばれた城門（枡形門＝一種の複郭陣地、高麗門・渡櫓で構成）の一つである鍛冶橋門は明治六年五月一日に取り払われました。ただしそれは高麗門・渡櫓の基礎はそのままで、木造部だけを取り払い、同時に門内の大番所も廃止して門の通行を自由にしました。

これは鍛冶橋門に限らず他の門も同じでした。そしてこの通行の自由が明治の近代化の第一歩でもありました。

因みに今の中央区域に関する他の城門の撤廃年月日を見ると、次のようでした。

明治六年中に常盤橋門が一二月中に、呉服橋門が一〇月一〇日、数寄屋橋門が三月一七日、山下橋門は七月一日、しかし幸橋門の基礎の撤去は大幅に遅れて明治三五年でした。この城門の自由化の順は当時の各門の交通量の順だったようです。

◇石造アーチ橋

一番早く城門が近代化したのは神田の筋違橋門で、明治六年三月一七日に撤去、その年の一一月一日には石造のアーチ橋の万世橋ができています。

その石は見附の枡形の基礎の石を利用したもので、双拱式といいますから現在の皇居の二重橋や日本銀行前の常磐橋と同じくアーチが二つある橋でした。

それが水面に写ると眼鏡の様に見えるところから、眼鏡橋または単にメガネと呼ばれて新時代の東京名物になりました。

しかし『中央区年表　明治文化篇』の明治六年の末尾に月日不明の項に

「○柳原堤が切崩され、浅草見付御門も取除かれる。古材を用いて単拱式の石橋を造り、浅草橋の擬宝珠は赤坂弁慶橋に移した」

という記事があります。

赤坂の弁慶橋は明治二二年（一八八九）一月一五日にできた橋ですから、この年表の記事の資料はそれからかなり時間が経ってからの材料を利用したものと思われます。

また私の好きな絵師の井上安治（一八六四～八九）の『東京真画名所図解』（昭和四三年一一月一五日刊　平凡社限定復刻）には、図番76に鉄橋の浅草橋、78が石橋に描かれています。

もちろん図番は出版社が後から付けたものですが、それにはそれなりの根拠があってのことです。

しかし鉄橋の方には左端に鉄道馬車が走っていますから明治一五年（一八八二）一〇月以後の絵と言う事が分かります。ですから私

には図番が入れ代わっているように考えられます……

それはさておき安治はこの浅草橋を始め同書の図番2に二重橋、15に汐留（蓬莱橋）、29に京橋、35に鍛冶橋遠景、37と42に万世橋の石造アーチ橋を描いています。その絵から問題の鍛冶橋は単拱だったことがわかります。

このほか区内には江戸橋・海運橋・荒布（あらめ）橋・桜橋・呉服橋など合計一〇の橋が石造アーチ橋になっています。

◇アーチの下の映画館

この石造アーチ橋が大正二年（一九一三）に掛け替えられるときに、その橋脚の下から鍛冶橋人骨群が発見されたのです。

単拱式ですから橋脚は二つある訳で、どちら側から出たかは不明ですが、江戸前島＝地質学での日本橋台地（洪積層）の上であることは変わりません。

これを『丸の内一丁目遺跡』（98日本国有鉄道清算事業団千代田区丸の内1－40遺跡調査会刊）で見ると図2「調査地周辺の地層断面想定図（『東京地盤図』等より作成）」という余り要領の得ないカラー図を掲載した上で、

「調査地周辺の外堀が強固な洪積層まで掘削して人工的に構築された堀であることが確認された。」

とあるだけでした。

そもそも「調査に至る経緯」の主要な柱は、同書に拠ると「隣接する鍛冶橋付近から中世の人骨が出土し、中世墓地の存在する可能性があることなどから、遺跡の存否確認調査を実施することが望ましい」点にあったようなのですが、残念ながらこの調査報告書ではその事にはほとんど触れていません。

話が戻りますが、安治が描いた石橋をはじめ多くの石橋は、常磐橋を除いて大正期になると全部掛け直されています。

鍛冶橋の場合は大正三年一〇月に完成、昭和二五年三月に埋め立てられて廃橋になりました。

しかし後に橋の下に「鍛冶橋キネマ」というニュースを掛ける映画館ができ、都庁のすぐ下にあるのでよく入ったものです。

『日本人の骨』を読んだ途端、この「鍛冶橋キネマ」の暗闇を思い出しました。おぼろげな記憶からすると、当時の地表から四メートルぐらい下がったところが映画館のスクリーンの中心だったように思えます。……いま考えると多分映画館の床の辺りが鍛冶橋人が眠っていた深さだった……などと……それも三七年前の思い出になってしまいました。

◇肥後の石工

明治になって東京の多くの橋が木橋から石橋や鉄橋に転換されました。そのうちの石造のアーチ橋の場合の技術は、熊本県の通潤（つうじゅん）橋で代表される肥後の石工の一族の技術が採用されました。

皇居の二重橋（明治二〇年竣工）もこの一族の手によったものです。

同じ技術の系譜のものに長崎県の長崎市内の眼鏡橋群、諫早市の眼鏡橋などがあり、鹿児島市内にも甲突川に立派な眼鏡橋があります。

かつて『肥後の石工』という少年少女向けの本を読んでから、通潤橋を初め九州各地の眼鏡橋めぐりや調査を心掛けてきましたが、東京の近代橋梁技術は明治六年から九州の石工の技術に圧倒された時期を迎えた時があったのです。（この石工集団のことは、以下省略します）。

九州で「肥後」の石工が活躍した範囲と、明治新政府の中心的な勢力が属した藩の分布はおおむね一致しています。

明治政府が江戸城の見附（城門）を解放し、その〝廃材〟で橋を架け直したことは、多分に政治的な意図があったものと思われます。

それ以上に決定的な条件と思われるのは、江戸城に使われた石の大部分は安山岩の本小松石（湯河原町）・根府川石（小田原市）・月出石（伊東市）で代表される伊豆・相模地方から産出された石でした。

そこに「肥後」の代表的な安山岩である三角（みすみ）石（熊本県三角（みすみ）町）を使いこなしていた石工たちが、同じ石質の東京の安山岩の再利用に動員されたと考えるほうがより現実的であるかも知れません。

ともあれ石造アーチ橋は江戸っ子にとって、一つのカルチュア・ショックだったと思います。

◇江戸の太鼓橋

ここで付け加えておきたいことは江戸時代から明治中期まで目黒の行人坂の下に「享保の末に木食上人（心誉）が造った」といわれる石造アーチ橋がありました。「享保の末」というと一七三〇年代のことですから、明治初年の約一四〇年前のことです。

このアーチ橋は昔も今も洪水常襲河川である目黒川に架ける橋としては、最も適した様式の橋といえます。

『江戸名所図会』巻之三に「太鼓橋」のタイトルで立派な橋の挿絵が掲載されています。本文のほうには

「柱を用いず両岸より石を畳み出して橋とす　故に横面より是を望めば太鼓の胴に髣髴たり故に世俗しか号く」

とあります。

一説では木食上人が八丁堀の町人たちの後援で六年がかりで完成させたともいわれます。

この太鼓橋架橋の目的は江戸の南郊の行楽地でもあった目黒不動尊への参道の確保にあったわけで、都心の商業資本家の投資の在り方の一つの見本でもあったわけです。

明治一四年に参謀本部が測量した地図「二子村」にもこの橋は健在でした。

いまもほぼ元の位置に名だけは同じ太鼓橋でも、現実には平凡なコンクリート橋が掛っているばかりです。

また現存する都内最古の眼鏡橋は小石川後楽園内に円月橋があります。なんだか柴田錬三郎の「眠狂四郎の円月殺法」を思い出させるような橋名ですが、実はあの黄門様の水戸光圀が明国から招いた朱舜水の意匠で、日本の石工の駒橋嘉兵衛に造らせたものです。

つまり一七世紀初頭から石造アーチ橋が江戸にはあったのです。

しかしそれは水戸藩邸内の庭園でしたから一般には知られていなかったものです。

逆に多くの人目に触れている石橋に浅草観音の境内にある淡島様の石橋があります。ずいぶん手の込んだ造りですが、残念ながら今の私には詳しいことが分かりません。

なお日本最古の石造アーチ橋は寛永一一年（一六三四）に中国の僧侶如定が平戸に造ったそうです。

◇鉄橋弾正橋

最後に石橋ではなく、鉄橋で国指定の建造物重要文化財になった弾正橋について簡単に触れておきます。この橋は明治一一年（一八七八）七月に京橋楓川（ほぼ現在の首都高京橋ランプ入り口付近）に掛けられたもので、最初期の国産鋳鉄製の橋です。

鍛冶橋と同じ大正二年に新弾正橋が掛けられましたが、古い橋はそのまま残されていました。

しかし関東大震災後の復興事業で鉄橋は深川の富岡八幡宮の境内の一郭に移され、八幡橋と改称されて利用されていましたが、昭和五一年に橋の役目を終えて翌年文化財の指定を受け保存されています。この橋も文明開化のシンボルだったのです。

実は明治になって従来の木橋に加えて、鉄橋が登場したのは、現在の中央区内に限ると、この弾正橋の前に、明治一〇年四月一日に桜橋がまったく新しい橋として掛けられたのが最初でした。場所は弾正橋の東袂から築地に渡る（現在の八丁堀四―九辺から新富町一―三辺の間）もので、捕物帳でお馴染みの八丁堀と築地居留地を結ぶ橋として新時代に相応しく鉄橋が架けられたのです。今はその名残は桜橋ポンプ場の名に残るばかりです。

さらにそれから約一〇年後に、江戸時代には「鎧の渡し」で市民に親しまれた場所に、明治二〇年六月に起工、翌二一年四月七日に開橋式を挙げた鎧橋があります。

この架橋で人形町・蠣殻町が飛躍的に発展を始めたことはいうまでもありません。

そしてこの頃から隅田川にかかる橋も明治二〇年一二月九日に鉄橋で完成した吾妻橋を初め二六年には厩橋という具合に鉄橋化が進みます。

（鈴木理生）